

愛媛あかね和牛の発育性と枝肉形質との関連性

小松 歩

畜産研究センター

【目的】肉用牛経営は、飼料価格の高騰及び枝肉価格低迷の影響により厳しい状況下にある。その対策の一つとして若齢肥育技術の活用による生産コスト低減が期待されるが、枝肉重量低下に伴う収益性の低下が懸念される。「愛媛あかね和牛」は若齢肥育技術として、出荷月齢の目安を去勢 24 ヶ月齢、雌 26 ヶ月齢と定めている。全国平均と比較すると去勢肥育牛では出荷月齢 29.0 ヶ月齢、枝肉重量 514.5 kg（令和 5 年度）に対し、愛媛あかね和牛出荷月齢 25.3 ヶ月齢、枝肉重量 465.9 kg（令和 5 年度）と出荷月齢は 3.7 ヶ月齢短縮したが、枝肉重量は 48.6 kg 低く更なる増加が期待される。そこで、当センターで出荷した愛媛あかね和牛の発育性と枝肉形質の関連性を調査し、良好な枝肉成績が期待される牛の発育性について検討した。

【方法】令和元年度から令和 6 年度に当センターで繁養、出荷した去勢肥育牛 115 頭を全国平均枝肉重量 514.5 kg で良好区と非良好区に区分し、枝肉形質、生時体重、各月齢体重及び各月齢間日増体量（以下 DG）を比較した。

【結果】42 頭（36.5%）が良好区、73 頭（63.5%）が非良好区に区分された。枝肉形質のうち枝肉重量、胸最長筋面積、ばらの厚さ、B.M.S.No.、光沢、締まり、きめにおいて良好区は非良好区と比較して有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。発育性については、生時体重および全月齢体重においても良好区が有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。各月齢間 DG は良好区が多くの月齢で高く推移し、特に生時-1 ヶ月齢（良好区 0.75、非良好区 0.64）2-3 ヶ月齢間（1.20、0.92）、3-4 ヶ月齢間（1.34、1.22）、5-6 ヶ月齢間（1.23、1.13）、6-7 ヶ月齢間（1.33、1.15）では良好区が高い値を示した。

【考察】良好区では枝肉重量以外の枝肉形質も高い値を示したことから、枝肉重量向上が他の枝肉形質向上に繋がると考えられた。哺育期及び育成期の発育性から、良好区の骨格及び内臓の発達および育成期以降の筋肉等の発達も良好に推移したものと考えられた。以上のことから、去勢肥育牛において一定以上の生時体重かつ出生から育成期に良好な発育性を示した場合には、若齢肥育技術の活用により良好な枝肉成績が期待される。

畜種：牛、分類：畜産技術、キーワード：発育性、枝肉重量、枝肉形質